令和7年度インクルーシブな学校運営モデル事業 中間成果報告 【群馬県】

1. 概要

本事業の目的	【当該地域におけるこれまでの課題】 ・令和5年4月、文部科学省「効果的かつ効率的な巡回指導の実施に向けたモデル構築事業」を受託し、行政区を超えた通級による指導を実施し、地域の巡回指導の体制構築に関する実践研究を行っている。 ・令和5年7月、知事2期目の基本政策として、障害がある子もない子も同じ場所で共に学ぶインクルーシブ教育を推進するためのモデル校設置の方針が掲げられた。
	【本事業を通して達成を目指す目標】 ・小学校等と特別支援学校において、障害のある子とない子が共に協働的に学ぶことと、一人一人に応じて個別最適に学ぶことが両立するような柔軟な教育課程や指導内容等を開発する。

学校運営連携校	特別支援学校	小・中・高等学校
	群馬県立伊勢崎特別支援学校（障害種：知的障害） （R7児童生徒数）小：112名、中：58名、計170名	玉村町立上陽小学校 （R7児童数）230名

カリキュラム・マネージャー	【配置人数】 3名	【主な経歴】 ①元県立特別支援学校校長、②共愛学園前橋国際大学短期大学部教授、③群馬大学教授
	【本事業における役割】 CM① ：伊勢崎特別支援学校に配置し、両校を定期的に訪問する中で交流及び共同学習の授業づくりを牽引。両校の職員に対する研修や交流及び共同学習の授業づくりに当たって活用できるツールの開発に取り組んでいる。 CM②③：連携協議会に参加して取組に対する助言を行ったり、国内外の取組について紹介したりし、取組をバックアップしている。	

連携協議会	・【連携協議会において検討・議論した主な内容】 1 両校の状況や県による事業説明等情報共有 2 交流及び共同学習の授業づくりについての検討（本事業の目的や目標を両校の教育活動に沿って具体的にする） ・交流及び共同学習の全体計画及び年間計画 ・組織体制を具体的に構築し、教職員の役割等を明確にする ・授業の組立や題材、教材 ・どのような授業を目指すかのイメージづくり

2. 交流及び共同学習を発展させた柔軟で新しい授業の在り方

交流及び共同学習の発展の方向性・ねらい

・小中学校と特別支援学校の教員がそれぞれの授業スキルを活かしながら、多様な児童生徒が一緒に学べる授業づくりに取り組む。
・活動は一緒でもそれぞれ子供に合ったねらいを持ちながら、主体的に授業に取り組める学習環境作りに取り組む。

実施内容

令和7年度交流及び共同学習	
対象学年	・伊勢崎特別支援学校小学部4年 ・上陽小学校4年（3年生、知的特別支援学級、自閉症・情緒障害特別支援学級、肢体不自由特別支援学級も含む）
回数・教科	計5回（図画工作1回、生活単元学習4回（うちオンライン1回））
主な内容	図工：模様版画、ビー玉絵画、ガラスへの描画 生単：「みんなとつながる上毛かるた」上陽小児童が作った立体かるたとその遊び方によるグループごとの交流活動

オンラインでの自己紹介

指導内容・指導方法の工夫

・児童の学びを見守りながら支援する姿勢を教諭、介助員、コラボレーターなどで共通理解を図った。
・両校が隔たっているため、オンラインでの交流及び共同学習を行った。
・全体で授業内容や手順等の学習を行った後、グループに分かれてそれぞれで学習を行い、振返りで再度全体での学習に戻るなど、授業集団を柔軟に変化させた。
・グループに分かれた後の学習はそれぞれの実態に応じて内容を変えたり、教材を加えたり、丁寧かつ柔軟に行うことで一人一人の学びを支援し保障した。

考えた遊び方で遊ぶ

交流及び共同学習の成果

・競技ゲーム的な状況下での心理的な安定を保ち、札やルールという環境を把握し、チームの一員として他者と関わる人間関係を形成し、競技参加という形でコミュニケーションを図ることができた。
・子供たちはお互いにとても楽しんでいる様子が見られた。

3. 現行の教員配置にこだわらない専門性を高めた授業実施のための体制構築の在り方

教員や専門スタッフの配置等の工夫

・インクルーシブ教育アドバイザー1名を伊勢崎特別支援学校に配置（特配）し、両校の授業等を観察しながら特別支援教育や交流及び共同学習などについてアドバイスや相談を行った。
・具体的には、通常の学級に在籍する特別な支援を要する児童への対応方法や指導方法の助言及び提案、児童の特性把握のための観察や記録の整理、指導法や教材の工夫に関するコンサルテーションを行った。
・県費でコラボレーター3名を上陽小学校に配置し、日頃の授業や交流及び共同学習での支援を行った。
・具体的には、特別支援学級の児童が通常の学級で一緒に学習する際、集団活動の中子供同士が関わり合いながら学べるよう、言葉かけをしたり、促したりする支援を行った。

教員研修の実施

・両校の研修担当(研修主任、研修部長)が緊密に連絡を取り、課題等を確認しながらオンラインを行った。
・両校の児童が学習している動画を事前に準備し、互いに視聴した。
・研修を通しての学びや気づきは、児童の発達に応じた題材の工夫、学習環境の整備と工夫、視覚支援の工夫、授業の運び方や一人一人への接し方の工夫、子どもが自分で選ぶ自由進度学習などがあった。
・通常学校と特別支援学校の児童がどうすればうまく交流・学習ができるのか 悩んでいる という率直な意見と共に、両校の教職員が共通理解を図り目的を明確にすることで 児童にとって有意義な交流が可能になるのではないかという意見も出された。

両校のオンライン研修

学校運営連携校間における連携・校内体制の構築

【連携】
・交流及び共同学習の授業担当者達の打合せや振返りなどにオンラインを活用して行った。
・授業担当者達は両校を相互に訪問し、児童の様子や施設設備等を確認しながら事前打合せを行った。

【校内体制】
・ブロックチーム担任制：低中高2学年ずつのブロックとし、担任が定期的に入れ替わるシステムを導入し、子供が多様な大人と関われる環境を構築。
・校内支援室「YUMEルーム」の設置：多様な困難を抱える児童がいつでも教室から離れて利用できる環境を構築。

4. 成果と課題

本事業を通じた児童生徒・教職員の意識等の変容

【児童生徒】
・自立活動の項目「人間関係の形成」「心理的な安定」の面において、他者からの働きかけを受容する力や新しい環境へ適応する力といった、社会性の基礎となる領域で成長があった。
【教職員】
・上陽小の教職員は伊勢崎特別支援学校など特別支援学校の教育について、伊勢崎特別支援学校の教職員は上陽小など小学校の教育について双方が十分に理解していないことを知った。また、そのことを補うための一体研修として児童の実態の捉え方、教育課程や学習指導要領、指導や支援の方法、学校や教室などの教育環境などの理解の必要性を理解することができた。

前年度からの変化・改善点	・1年目は交流及び共同学習に取り組む学級担任同士の意思疎通が図られ、立案や授業がスムーズに行われた。2年目は両校の研修担当者(研修主任、研修部長)同士が連携して一体研修を行うようになり、教職員の意識が高まるとともに意思疎通や交流及び共同学習についての理解が広がった。 ・カリキュラム・マネージャーの他にインクルーシブ教育アドバイザーが加わったことで教職員への支援力が高まり、両校のインクルーシブ教育や交流及び共同学習などについて考える契機を提供できた。 ・コラボレーターが加わったことで交流及び共同学習での支援力が高まった。

令和8年度事業の展望

・日頃の学級運営や授業においてユニバーサルデザイン的な考え方を取り入れ、発展的な交流及び共同学習に取り組むための素地を醸成する。
・これまで図工や音楽、体育等で行われることの多かった交流及び共同学習を国語や算数などの教科に広げていく。
・交流及び共同学習では、両校それぞれの教育課程に沿って同一の授業を異なる教科として実施したり、教科等横断的な学習で実施したりする。
・交流及び共同学習を充実させるために両校教職員が両校児童の実態を理解する、相互の教育課程や指導要領などを理解する、日頃の指導方法や学習方法などを理解する、日頃の学習環境などを理解するなどの研修を重ねる。

課題・今後の展望	・離れた学校ではオンラインを活用して交流及び共同学習を補える可能性があることを提案 ・小学校において特別支援学級の児童の実態や教育課程を協力学級の担任が理解し、授業を自然に受けられるようになるためにどのようなことが必要であるか、どのように取り組めばよいかを提案 ・特別支援学校のセンター的な機能として、国語や算数などの教科における交流及び共同学習の事例提供 ・コラボレーターや介助員などは、例えば専門性が高く経験が豊富なインクルーシブ教育アドバイザーなどのアドバイスや相談を受けることで飛躍的に児童理解や支援の力などを高めることができることを提案 ・簡易で負担の少ない打合せシートや振返りシート、指導案様式などの作成